

Title	魔法の食卓 : 児童文学に見る〈食〉と魔法の関係
Author(s)	松本, 祐子
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 31-41
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=917
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

魔法の食卓

～ 児童文学に見る〈食〉と魔法の関係 ～

松 本 祐 子

The Magic Table:

The Relationship between Food and Magic in Children's Literature

Yuko MATSUMOTO

People in the modern world are usually too busy to find enough time to prepare good meals for themselves. They may sometimes dream that they could easily enjoy a wonderful feast if they had magic power. In fantasy fiction, however, there seem to be surprisingly few wizards or witches who eat such magic food at every meal. Magic food is used to tempt and deceive someone, but it seems to have little effect on maintaining human bodies.

In fantasy fiction, “magic food” suggests two meanings. One is the case that the food itself has some mysterious effect. The other is the case that some magic power is used to prepare food. This paper emphasizes the latter case. There are three patterns in food prepared with magic: one appearing abruptly from nowhere; one brought from somewhere else in a moment; and an illusionary one which does not exist in reality. Which kind of magic food is described depends on the theme of the story.

Even the authors who can make their own glorious world by the magic of words tend to hesitate to make real food out of nothing in their story. That is because imaginary power cultivates human minds but does not nourish human bodies. This paper attempts to clarify the significance of food by interpreting the role of magic food in various fantasies.

Key words: magic food, fantasy, wizards, witches

はじめに

近年、食品会社による賞味期限改竄、産地偽装、杜撰な衛生管理など、食の安全を脅かす様々な事件が頻発する中、食育への関心は急速な高まりを見せている。2005年、健全な食生活を重視した

魔法の食卓

食育基本法が成立し、今や時代は、ファースト・フード志向からスロー・フード回帰へ移り変わろうとしているのかもしれない。それでも、我々の生活の中には手軽で便利な食品が溢れかえっている。豊かで充実したスロー・フードへの憧れはあっても、多忙で欲張りな大方の現代人には、毎日の食にゆっくり時間と手間をかけるゆとりはない。

素材を生かしたヘルシーな日本食が世界中で注目される一方で、ファッション雑誌等のマスメディアによって造られ、広められた〈セレブ〉という虚飾に満ちたイメージが力を持ち、一般大衆は、煌びやかな衣装に身を包んだ世界の〈セレブ〉たちが、毎夜、どれほどゴージャスな饗宴にうち興じているのだろうか、あれこれ想像を逞しくする。ダイエットに励み、〈メタボ〉対策に頭を悩ませる矛盾を抱えながら、誰しも一度は夢見たことがあるのではないだろうか。もしも魔法が使えたら、杖をほんの一振りするだけで、素晴らしいご馳走の並んだ食卓を用意することができるのに……と。

それでは、奇跡のような魔法を使うことが可能な存在、人々の夢の産物とも言うべき物語に登場する魔女や魔法使いたちは、いったい、どんな魅力的な〈食〉を享受しているのか。果たして、彼らの食卓には、どれほど豊かなご馳走が並んでいるのだろうか。物語——特にファンタジー系の児童文学に描かれる「魔法の食べ物」に注目し、魔法が〈食〉とどのように関わっているかを読み解くことで、人の営みにとって必要不可欠な〈食〉の意味について改めて考えてみたい。

1. 「魔法の食べ物」とは何か？

魔法の食べ物と言え、大きく分けて、二つのイメージが思い浮かぶ。第一に、食べ物自体に何らかの魔法の力が秘められているもの、第二に、魔法の力で用意された食べ物である。

まず、第一の「食べ物自体に魔法の力が秘められているもの」では、それを食することで、人に不思議な効果をもたらされることになる。たとえば、不老不死の効能がある神酒・ネクタル (nectar)、神肴・アンブロシア (ambrosia) などの神話に登場する架空の食べ物や、『不思議の国のアリス』の〈私を飲んで〉ドリンク、〈私を食べて〉ケーキのように、食べた途端に身体が大きくなったり小さくなったりする荒唐無稽な食べ物があるかと思えば、ハーブや薬草を材料として作られた、現実の世界にも存在しそうなもの、あるいは、存在したとしても、あまり違和感のない食べ物もある。魔女や魔法使いの使う魔法が、超自然の力というより、むしろ、先人たちから受け継がれた知恵と知識の象徴であると考えれば、物語の中で描かれる魔法が現実世界の医学や薬学と酷似しているのは当然であろう。

第二の「魔法の力で用意された食べ物」は、通常なら、それなりの時間と手間、テクニックが必要なはずの料理が、一瞬にして目の前に現れるというものである。その魔法が、どのような仕組みによって可能になるのかについては、作品中で説明される場合と説明されない場合があるが、およ

そ、三つのパターンが予想される。

- ①まったく何もないところから、忽然と食べ物を生み出す。
- ②空間移動によって、どこかに存在していた食べ物をその場に持ってくる。
- ③目くらましによって、本当は存在しないものを食べているかのように錯覚させる。

それぞれの物語に登場する魔法の食べ物がどのパターンに属するかは、そのまま、作品に描かれる魔法の本質に深く関わってくると言えるのである。

第二の魔法の食べ物が、料理のプロセスの省略、すなわち、食に関わる手間と時間を軽減することを目的とするならば、熱湯を注いで三分で出来上がるカップラーメンや、レンジでチンの冷凍食品は、科学で実現した魔法の食べ物とも言えるかもしれない。ただし、省略されたかに見えるプロセスは、我々の見ていないところで、機械、または別人の手で行われているだけであることは言うまでもない。それが現代の魔法=科学のからくりであるが、物語の中の魔法にも、実は同じようなからくりが使われている可能性があることは後で述べたい。

魔法の力を秘めた食べ物にせよ、魔法の力で用意された食べ物にせよ、すべての魔法の食べ物が現実からかけ離れたものばかりとは限らない。ファンタジーという夢の世界の食べ物であるとしても、ある一定の法則に従って存在してこそ、現実味を帯びるのである。

2. 甘い誘惑

A. お菓子の魅力

魔法によって一瞬のうちに素晴らしいご馳走が食卓に並ぶというイメージの一方で、魔女が森で草を摘み、妖しげな材料で料理をするというイメージもまた一般的である。伝統的に、家庭の料理が「女の仕事」として位置づけられている以上、『マクベス』に登場する三人の魔女に代表されるように、魔女たちはぐつぐつ煮えたぎる大鍋をかき回し、得体の知れないものを作るのである。

魔女たちは、大人の男を誘惑する時は性的魅力を使うが、子どもを誘惑する時は甘いお菓子を使う。『ヘンゼルとグレーテル』のお菓子の家は、正に子どもにとって夢の食べ物である。飢えに苦しむヘンゼルとグレーテルでなくとも、お菓子の家の前を素通りできる子どもなどいるまい。

ずっと近づいてみると、家はパンで造られ、屋根は菓子でふいてありました。窓は、すきとおった砂糖でできているのです。¹

魔女はこのお菓子の家をどのように建てたのだろうか。「あのパンの家も、ただ、子どもたちを

おびきよせるためにたてたのです」とあるが、家を建てたプロセスについては記述がない。魔女の家に立派なパン焼き竈があるところを見ると、材料であるパンやお菓子は、魔女がみずから焼き上げたのかもしれない。ただ、そのパンとお菓子を材料にして、目の悪い魔女が手作業でお菓子の家を組み立てていったのかどうかは疑わしい。何らかの魔法がなければ、実際に人が住めるだけの耐久性があり、しかもおいしく食べることのできるお菓子の家をたった一人で作り上げるのは、まず不可能であろう。子どもを誘惑する目的を持ったお菓子の家は極めて魅力的であると同時に、その成り立ちは曖昧で、どこか胡散臭い雰囲気が漂う。

一方で、この魔女は、自らの食欲を満たすためには、お菓子の家で新鮮な食材（＝子ども）をおびき寄せ、最高のご馳走に仕上げようと、まず、その食材を養い、太らせてから、竈でじっくり焼き上げる手間をかけることを厭わない。そこには、安易な魔法による手抜きやごまかしは一切見当たらない。たとえお菓子の家を作るだけの魔法の力を持っているとしても、自らの食を確保するためには魔法は使用しないのである。

お菓子で子どもを誘惑する魔女として思い浮かぶもう一人の例は、『ナルニア国物語』第一巻『ライオンと魔女』の白い魔女である。² 白い魔女は、エドマンズの望みに応じて、どこからともなく、甘いゼリーのお菓子・ターキッシュ・ディライト（Turkish delight = トルコの歓び。トルコ名はロクム）を出現させる。白い魔女は、この異世界のお菓子、しかも「トルコの歓び」というエキゾチックで異教的で艶めかしい名を持つ食べ物をどのような魔法を使って呼び出したのだろうか。確かに白い魔女は『ライオンと魔女』以前の時代を扱った『魔術師のおい』において、ロンドンに現れたこともあるのだが、それにしても、ほんの数時間の滞在で、トルコという国が存在するという知識を得たとも思えず、ましてや、ターキッシュ・ディライトというお菓子が（イギリスでは比較的、ポピュラーなお菓子であったとしても）どのような食べ物であるかを知っているはずもない。だとすれば、エドマンズの発した言葉のみを手がかりにして、何もないところからターキッシュ・ディライトを出現させることができるのか大いに疑問である。ナルニアから見て異世界である我々の世界に存在するターキッシュ・ディライトを空間移動で呼び寄せたと考える方がまだしも納得がいくが、おそらく、最も可能性が高いのは、エドマンズの心に魔法をかけて、好物のターキッシュ・ディライトを食べているかのような錯覚を起こさせたということではないだろうか。そう考えれば、エドマンズを誘惑した魔女のお菓子は、結局、実体のない幻に過ぎないのである。

ニュージーランドの児童文学作家、マーガレット・マーヒーの短編「魔法使いのチョコレート・ケーキ」（“The Good Wizard of the Forest”）には、魔法の腕は今ひとつだが、料理の腕には自信のある男の魔法使いが登場する。³ 彼は得意のチョコレート・ケーキで町じゅうの子どもたちをお茶に招待しようとするが、何か悪い企みがあるにちがいないと誤解され、子どもたちは誰一人招待に応じることはない。何年も淋しい思いをした後、ついに子どもたち（＝最初に招待状をもらった子どもたちの子孫）が魔法使いのチョコレート・ケーキを食べに来てくれるのだが、その時に振る舞

われる彼のケーキはあくまで手作りのものである。子どもを誘惑するために、瞬くうちに空中から取り出される魔法のターキッシュ・ディライトはただの幻でよかったとしても、子どもたちと友達になるために用意される魔法使いのチョコレート・ケーキは、心を込めて作られた本物でなければならないのである。

これらの例から見えてくるのは、極めて大雑把な分類ではあるが、料理の過程が見えないものは実体のないネガティブな〈食〉であり、料理の過程が見えるものは実体のあるポジティブな〈食〉であるということだ。特に、魔法という「安易」な方法で目くらまし的に用意された食べ物は偽りのものであるという印象が強い。人の血となり肉となるポジティブな〈食〉には、材料を選び、料理するプロセスが必要だということが暗示されているように思われる。現代においても、料理の手間を省くのは横着なイメージであり、そこから生じる否定的なニュアンスは、家族の健康を守る義務を負うべきものと見なされる家庭の〈主婦〉が、出来合いの総菜やインスタント食品ばかりを食卓に並べる時の後ろめたさを説明するものであろう。

B. りんごの二面性

甘いお菓子と同様、赤く瑞々しいりんごにも、人の心を惑わせる独特の魔力が秘められているらしい。白雪姫の継母は、美しい白雪姫をこの世から抹殺するために毒りんごを作った。

それからお妃は、だれもくることのない、とてもひっそりした部屋にとじこもると、そこで毒のあるりんごをこしらえました。見たところ、それはとてもきれいでした。赤い頬をして白かったので、見さえすればだれでもほしくなるほどでした。けれどもこのりんごをほんの一きれでも口にしたものはきっと死ぬのでした。⁴

この毒りんごは、もともと魔法の食べ物であったというわけではなく、魔術を心得ている邪なお妃が、一室にこもって毒を仕込んだものである。ディズニー映画では、白雪姫と美を競い合うどころか、醜い容貌の典型的な魔女そのものであるお妃が、毒液の泡立つ大鍋にりんごを浸す場面が描かれる。白雪姫の毒りんごと言えば、ネガティブなイメージを持つ食べ物の最たるものであるが、憎いライバルを殺すという目的のために、お妃は手間暇かけて、必殺の毒りんごを作り上げるのである。殺人という実効を持たせるためには、それだけのプロセスが必要になるということである。

もともと、りんごには永遠の命、永遠の若さを象徴するポジティブなイメージがある。北欧神話にも、若返りの効果があるイドゥンのりんごが出てくる。元来はポジティブな食べ物でも、食べ方を間違えると、ネガティブな食べ物になり得るのである。アダムとイヴは禁断のりんご（木の実）を食べて、エデンを追放され、死すべき身となった。ナルニアの白い魔法は、『ライオンと魔法』においては、ターキッシュ・ディライトでエドモンドを誘惑したが、『魔術師のおい』では、銀色

魔法の食卓

のりんごでディゴリー少年を誘惑する。ディゴリーは何とか魔女の誘惑を退けることができたが、魔女自身は魔法のりんごを食べて、望み通りの永遠の命を手に入れる。銀色のりんごはナルニアを守る楯となり、このりんごが生い茂っている間は、魔女はナルニアに近づくことができないとアスランは言う。魔女は自ら、りんごを食べてしまったが、「だからこそ、残ったリングはすべて、あの者にとって恐ろしいものになってしまったのだよ。時と方法をあやまってあの木の実をもぎとって食べた者は、みな同じ目に合う。木の実はいいものなのに、そのさきいつまでもいみきらうようになるのだよ。」⁵ りんごには同じ魔法の力が備わっているが、誰がどう食べるかで異なった結果が現れる。同じ食べ物が、食べ方によって毒にも薬にもなるということである。この場合の「悪い食べ方」は、自らの欲望のままに食るということになる。

魔法の食べ物ならずとも、一般に食事というものは、「誰とどう食べるか」で味から意味合いまで大きく異なってゆくことは、よく知られている。そのように考えると、魔法は食べ物の中というより、むしろ人の心の中にあり、物語世界のみならず、現実世界でも十分に効力を持つものと言えるかもしれない。

3. 幻のご馳走

何もない空間から忽然と現れた魔法のご馳走が単なる幻や見せかけでなく本物であるという例は、物語の中でも意外に少ないように思われる。たとえば、ポーモン夫人の『美女と野獣』では、野獣の城には召使いのいる気配はないのに、美しいベルのために、いつの間にかご馳走の並んだテーブルが用意されている。⁶ ベルは毎日、ひとりでこの料理を食べ、野獣はそれをかたわらで眺めているだけだ。呪いをかけられた野獣が何を食べているのかは語られていない。里帰りしたベルが野獣との約束を破って滞在を長引かせ、ようやく戻ってきた時、野獣は死にかけている。ベルを失った哀しみのあまり、何も食べないで死のうと決意したのだ。つまり、それまでは何かを食べていたはずなのだが、ベルの前で食事をしないのは、ベルとは違う食べ物、いわゆる「野獣」の本能に従った物を食べていた可能性も考えられる。ベルは最初、自分は野獣に食べられてしまうのだと思っていたし、ベルの嫉妬深い姉たちは妹にわざと約束を破らせて、腹を立てた野獣に食べられてしまえばいいと考える。悪い妖精の呪いで野獣に変身させられた王子がどうして魔法を使えるのか、ベルのための料理を用意したのが野獣自身の魔法なのかどうかもはっきりしないが、少なくとも、野獣が自分自身の〈食〉を魔法で確保している様子は描かれていない。

それでは、物語の中の魔法使いたちは、自分自身の日用の糧をどのように調達しているのだろうか。アーシュラ・ル・グウィン「ゲド戦記」シリーズとJ.K. ローリングの「ハリー・ポッター」シリーズは、顔に傷を持つ魔法使いが主人公であること、魔法使いの学校が描かれていることなど、いくつかの共通点もあるが、本質的な魔法の在り方については、実に対照的である。「ゲド戦記」

においては、正規の訓練を受けた魔法使いたちは、魔法は本当に必要な時以外には決して使用してはならないという極めて厳格なルールに縛られているが、一方の「ハリー・ポッター」では、まさに何でもありの夢の遊園地のごとく、多種多様な魔法が無節操に氾濫している。〈食〉の描かれ方に関しても、二つの作品には大きな違いが見られる。

A. 言葉は食べられるか？

まず、「ゲド戦記」の場合、男子のみが入学を許されるローク学院で魔法を修めた魔法使いたちは、魔法を使う姿勢だけでなく、すべてにおいて禁欲的である。第四巻の『帰還』では、彼らが性欲を断つことで魔法の力を手に入れていたことが明らかになるくだりもある。もちろん、食欲が重視されるわけもなく、彼らの食生活は質素きわまりない。素晴らしいご馳走の並んだ魔法の食卓など、決して描かれることはない。シリーズ第一巻の『影とのたたかい』において、ゲドと親友エスタリオルの妹であるノコギリソウの間に次のような会話が交わされている。

「……………だけど、それにしても、わたしにはどうしてもわからないわ。あなたも、うちの兄も、どちらもすごい力を持った魔法使いなんでしょう。それならちょっと手を動かして、呪文を唱えれば、何だってできるはずなのに、どうしておなかをすかせたりするの？ 舟に乗って、食事の時間がきたら、『ミート・パイよ、出る！』って言えばいいでしょ？ そしたら、パイが出てくるんだから、それを食べればいいじゃないの。」

「そりゃ、そうしようと思えばできないことはないさ。だけど、わたしたちは、自分たちのことばを食べることはしたくないんだ。『ミート・パイよ、出る！』って言ったって、それはつまるところ、ことばでしかないだろ？ そりゃ、香りだって、味だってつけられるし、それを食べれば腹いっぱいにもなる。だけど、それはやっぱり、所詮ことばなんだ。満腹感だけは味わえても、腹のすいた人間が、それで本当に元気になるということはないんだよ。」⁷

強い力を持つ魔法使いなのに、なぜ魔法で食べ物を出そうとしないのかというノコギリソウの質問は、読者の誰もが抱く素朴な疑問を代弁するものであろう。もちろん、やろうと思えばできるが、やりたくないのだとゲドは答える。魔法をみだりに使ってはならないという掟のせいばかりではない。魔法のミート・パイは人に満腹感を与えることはできても、決して本当の滋養にはならないというのである。つまり、この作品における魔法の食べ物は、人に本物を食べているかのように錯覚させるだけの幻に過ぎないということになる。呪文を唱えることで取り出された魔法の食べ物など、「所詮ことばに過ぎない = Only a word」とゲドは言う。言葉による魔法がすべてとも言うべきアースシーの世界の中で、そもそも、ル・グウィン自身が、何より言葉の力によって華麗な空想世界を創り上げる物語作家でありながら、その言葉を卑下するような台詞をゲドに言わせていることには、

魔法の食卓

いささか矛盾が感じられなくもない。だが、逆に考えれば、石ころを本物のダイヤモンドに変えられる魔法の力をもってしても、本物の食べ物を空中から取り出すことはできない、つまり、人々の日々の糧となるべきものは、それほど複雑で重層的なものなのだとすることを示唆していることになりはしないだろうか。太陽と大地の恵みとしての収穫物、それを育てた人々の働き、さらにそれを料理し食卓に並べるまでの手間と心遣い、そのすべてに感謝する気持ちと切り離された〈食〉がいかに意味のないものであるか、我々は考えさせられるのである。

B. 誰が料理を作るのか？

「ゲド戦記」シリーズとは対照的に、「ハリー・ポッター」シリーズに描かれる〈食〉のイメージは、極めて享乐的、祝祭的であると言える。ハリー・ポッターが初めて魔法界に向かうために乗り込んだ列車の車内販売に登場する愉快で不思議なスナック菓子の数々は、腹ぺこのハリー・ポッターの胃袋のみならず、読者である子どもたちのハートも鷲掴みにする。『ヘンゼルとグレーテル』のお菓子の家と同様に、夢のようなお菓子が溢れかえる hogwarts 村の〈ハニーデュークス〉に行ってみたく思わない子どもは、まずいないだろう。ただし、これらの魔法のお菓子は、〈パーティー・ポッツの百味ビーンズ〉のようにメーカー名らしきものが冠されているものさえあって、いかにも現代風であり、その製造工程は明らかにされていないが、どこかに製造工場があって、おそらく、オートメーションに酷似した魔法の生産ラインによって大量生産されている可能性が高く、商業主義的なにおいがぶんぶんしている。そのため、ある意味、魔法の食べ物としての神秘性は稀薄であると言えるだろう。実際、百味ビーンズや蛙チョコレートは、現実世界でも売り出されている。

一方、格式と伝統を誇る hogwarts の食卓には、昔ながらのイギリス料理のご馳走が並んでいる。お皿の上に次々と現れるご馳走にハリーは圧倒される。食堂に集まった全員がお腹いっぱいになると、食べ物は消え去り、お皿はぴかぴかになる。面倒な料理も皿洗いもなし。しかも、正真正銘、人を満腹させ、元気にするご馳走なのである。これこそ正に、人々が夢に見る魔法の食卓――。

ところが、第3巻『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』において、hogwarts の食卓に並ぶ料理の作り手が誰であったかが、突如として明らかになる。⁸ ご馳走の数々は何もない空間から現れたのではなく、実は、百人にも及ぶ屋敷しもべ妖精たちが、地下にある厨房で、きちんと素材から作り上げていたのである。著者 J. K. ローリングが最初から、hogwarts のご馳走を「誰かの作った」料理と想定していたのかどうかは定かではないが、子どもたちの血となり肉となる料理が、どこからともなく現れた幻の食べ物でなく、誰かが手作りしたものとしていることには大きな意味があるのではないだろうか。ここでもまた、手軽で便利な魔法ではお腹は膨れない、ということが暗示される。

屋敷しもべ妖精は、衣服を与えられると、仕えている主人から解放されるという特徴から、伝承の妖精ブラウニーの要素が色濃いが、同時に、契約によって魔法使いの僕となる使い魔（＝

familiar) の役割も併せ持つ。魔法ファンタジーにおいては、魔法使いたちが、こうした使い魔や修行中の弟子たちに身の回りの世話をさせる姿がしばしば見受けられる。モダン・ファンタジーの旗手ダイアナ・ウィン・ジョーンズの『魔法使いハウルと火の悪魔』でも、魔女の呪いで老婆になってしまったソフィーが、プレイボーイの魔法使いハウルの家に押しかけ、家政婦として掃除やら料理やらを取り仕切る。⁹料理の火力は、契約によってハウルの使い魔となった火の悪魔カルシファーだが、料理するのはソフィーである。同じダイアナ・ウィン・ジョーンズの「大魔法使いクレストマンシー」シリーズ第一巻『魔女と暮らせば』においても、クレストマンシー城にはメイドもいれば料理人もいて、優雅な中産階級風の暮らしが営まれている。¹⁰登場人物の大半が魔法使いであるこの物語でも、魔法によって料理がたちどころに現れる場面が描かれることはない。

使い魔や弟子たちの手を借りるのでなく、魔法使い本人が自分自身の魔法によって料理を用意するユニークな例を挙げてみたい。ユーモア・ファンタジーの「魔法の国ザンス」シリーズの第一巻『カメレオンの呪文』では、「めくらまし」の術に長けた魔女アイリスが、主人公の青年ピンクに、好きなものをなんでもご馳走すると言う。その料理は「本物」なのかとピンクが尋ねると、アイリスはしぶしぶ答える。

「どうしても知りたいなら、言うわ。煮たお米よ。百ポンド入りの袋があるの。わたくしが飼っているめくらましのネコの正体を、ネズミが見破って、袋をかじらないうちに、お米を使いきってしまわなくてはならないの。もちろん、わたくしはネズミのフンを、キャビアの味に変えることができるけど、どちらかといえば、したくないのよ。だけどあなたは、なんでも好きなものが食べられるわ。なんでも」¹¹

ピンクは、実は煮た米であるが、極上の味のドラゴン・ステーキを堪能し、おそらく水であろう、一日じゅう飲んでも決して酔うことのないというコクのあるワインを楽しみ、デザートには、手作りのチョコレート・チップ・クッキーを食する。ピンクは、「魔女アイリスは、めくらましとはいえ、料理や菓子作りについては、あきらかに^{レキ}なにかを心得ている」と考える。つまり、実際に料理の心得がなければ、たとえ魔法の力を借りたとしても、おいしい料理を現出させられるわけがないということで、それは誠に理にかなった考え方であるように思われる。魔女アイリスの料理が単なる幻ではなく、実は煮たお米であるというところにもリアリティがある。アイリスの魔法の料理は、研究と努力と才能の賜であり、安易で手軽なインスタント食品では決してないのである。

C. 魔法と現実の間

少女小説の古典、バーネットの『小公女』は、非ファンタジーでありながら、物語の随所に魔法のイメージがちりばめられている。無慈悲で計算高い学院長・ミンチン女史に虐げられながら、け

魔法の食卓

なげに生きるヒロイン・セーラは、飢えと寒さに苦しんでいる。拾った四ペンスで買った甘パンを六つのうち五つまで乞食の少女に分け与えた後、たった一つ残ったパンを「このパンは、まほうのパン、食べても食べても、へらないパンなの。」(p.96) とつぶやきながら、ゆっくりゆっくり味わうセーラ。アーメンガードからの差し入れのケーキやミート・パイでパーティを開こうとした寸前にミンチン女史に見つかり、すべてを取り上げられた後、泣きながら眠りについたセーラがふと目覚めると、部屋は暖かく、テーブルの上には食事の支度が出来ている。それは実は、隣家に住むインドの紳士が届けさせてくれたものなのだが、まるで魔法使いが持ってきてくれたようだと言ったセーラは思う。お相伴にあずかったベッキーが、魔法が消えてしまったらもったいないから、残さず食べてしまった方がいいのではと提案すると、セーラは言う。「だいじょうぶよ、ベッキー。まるで、まほうのようだけれどね、これは、たしかに、ほんもののパン、そして、ほんもののお友だちの友情よ。」¹² どんなにつらい時も、持ち前の想像力による「つもりごっこ」で自らを励まし、常に矜持を失わなかったセーラだが、想像という魔法が産み出す食べ物は、はかなく消えてしまうものだという共通認識が当然のようにそこにある。『小公女』という作品が、どんなに少女たちの想像力をかき立てる夢物語であったとしても、リアリズムの範疇にある以上、フェアリー・ゴッドマザーの役割は、インドの紳士という生きた人間が果たさなければならなかった。それによって、セーラに与えられた食べ物は空腹を満たす本物になるのである。魔法ファンタジーの書き手たちの意識の中にも、こと食べ物に関する限り、魔法=幻という図式が焼きついているのかもしれない。

おわりに

一般に我々が「魔法のような」という比喻を使うとき、それは種も仕掛けもないところから何かが出現したかに思われる現象を指すことが多い。もしも魔法を使えば、どれほど贅沢三昧な〈食〉を実践できるだろうか——。そんな我々の夢に反して、物語世界の中では、自分たちの〈食〉を魔法によって確保している魔法使いたちは意外なほど少ない。人々が夢に見る窮極の魔法の食卓に最も近い Hogwarts のご馳走さえ、実は人に見えない地下にいる屋敷しもべ妖精たちの実質的な奴隷働きによって可能になっているというからくりが気づき、我々は改めて、〈食〉の持つ重みについて考えさせられる。言葉を魔法にして、思い通りの架空世界を創り上げることが可能な物語作家たちの意識の中でも、毎日の〈食〉は別格のものとして扱われるのである。

店頭に並ぶ食品から信頼性が失われ、誰が作ったかわからない加工品の危険性が増大する今日、便利で手軽な〈食〉に安住していた消費者たちは、否が応でも意識改革を迫られることになった。今、日本中を震撼させている〈食〉にまつわる数々の嘆かわしい事件は、軽んじるべきでない日常の〈食〉を見知らぬ他人に安易に委ねてしまった現代人に下された天からの懲罰なのかもしれない。

〈食〉は人々の生活にとって必要不可欠なものだが、それだけに、厄介で面倒なものにもなる。

だからと言って、生きるのに必要なだけの養分を摂取できる万能のビタミン剤があったとして、それを日常的に使用したいと望む人が、どれほど存在するだろうか。〈食〉という行為の中に織り込まれた文化、思想、歴史の重みを受け止めながら、我々は実体ある日々の糧を今日も摂取するのである。

注

- 1 グリム、「ヘンゼルとグレーテル」『グリム童話集Ⅱ』植田敏郎訳、新潮文庫、p.71
- 2 C.S. ルイス、『ライオンと魔女』瀬田貞二訳、岩波少年文庫
- 3 マーガレット・マーヒー『魔法使いのチョコレート・ケーキ』石井桃子訳、福音館文庫
- 4 グリム、「白雪姫」『グリム童話集Ⅰ』植田敏郎訳、新潮文庫、p.227
- 5 C.S. ルイス、『魔術師のおい』瀬田貞二訳、岩波少年文庫、p.273
- 6 ポーモン夫人、『美女と野獣』鈴木豊訳、角川文庫
- 7 アーシュラ・ル・グウィン、『影とのたたかい』清水真砂子訳、岩波書店、p.242
- 8 J. K. ローリング、『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』松岡佑子訳、静山社
- 9 ダイアナ・ウィン・ジョーンズ、『魔法使いハウルと火の悪魔』西村醇子訳、徳間書店
- 10 ダイアナ・ウィン・ジョーンズ、『魔女と暮らせば』田中薫子訳、徳間書店
- 11 ピアズ・アンソニー、〈魔法の国ザンス①〉『カメレオンの呪文』山田順子訳、ハヤカワ文庫、p.122
- 12 フランシス・E・H・バーネット『小公女』吉田比砂子訳、集英社、pp.114-115